

バンドリ After Summer

SK—YM

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

突然ガールズバンドCIRCLEにあらわれた5人の男バンドグループ、蘭たちAfterglowはそれに困惑し…？

目次

1 話	S u m m e r S k y	1
2 話	へこむわー	6

1話 Summer Sky

1話

CIRCLE（サークル）の中でライブをしているグループ、Afterglowが壇上に立って、これから行われるライブのリハーサルを行っていた。

「蘭、そっちのマイク音通ってる？」

会場の真ん中でドラム担当 宇田川巴が声をだして確認する。

「うん、問題ない」

マイクを持っている人物、美竹蘭は大きく息をはいてスタジオの周りを見渡す。

「つぐみ、モカ、ひまりもセッティングOK？」

「問題なし!!」

青葉モカ、上原ひまり、羽沢つぐみの3人も大きな声で返事する。

（あとはライブを待つだけ…新しい曲も好評だといいな…）

蘭は少し緊張してココアを飲む。

「お、ここかなAfterglowのライブ、間に合ったかな」

一人の男がスタジオに入ってきた。

「誰だあれ」

「ライブって言ったから私たちのファンかなあ。暇だしいろいろを来てくれるかたの話とかきくのもいいんじゃない？」

そういって、巴とひまりが男子に近づいてった。

「もしかして、私たちのファンかな？」

「ん？そうそう！俺めっちゃファンなんだよ！最初のライブの時、偶然見てさー！それかいつも見てんだよな！もしかして、もう終わっちゃった？」

「え？まだ2時間くらい時間あるよっ」

「…」

3人に沈黙が走る。

「ま、まあライブに遅れないことには変わりないからいいんじゃないかな…？」

巴が男子にフォローする。

「あ、ああ…。お恥ずかしいところを…」

男子は赤くなり、顔を隠す。

「あははは…。そういえば君名前は？」

「あ、俺？ おれは…」

『バン!!』

後ろの扉は大きく空いた。

「夏己！おまえまた勘違いで早くきたろ！」

「まああいつのことだから予想はできたけどな…」

「このあほ」

「まあまあ落ち着いて」

4人の男子が口々にしゃべり始めてぐだぐだし始めた。

「えーと、なにこれ」

ひまりが汗を流しながら巴に状況をまとめてもらおうとするが巴自身も何言ってるのかわからない等に肩をすくめる。

「あーごめんこいつら俺のダチなんだわ、おーいお前らこつちこいよー」

夏己と呼ばれた男子が4人を呼ぶとこつちに近づいてきた。

「おぉー。ほんとにAfterglowのメンバーだ。へえー、ガールズバンドってみんな仲悪いイメージだったけど、全然ちがうな。」

背の低い男子は5人を見て感動している。

「すみません、もしかしてリハーサルの前でしたか？」

一番背の高い男子は申し訳なさそうに頭を下げる。

「い、いえー！全然！リハは昨日したので今はセッティングが終わったところなんです！」

ひまりがあわてて答えると

「ちよつと！5人とも！ここはガールズバンドのスタジオですよ！男子がどうして楽器をもってきてるんですか！」

うしろからCIRCLEのスタッフの人が現れた。

「え？でも今日からここ使っていいって月島さんから許可もらってるんですけど…」

男子の一人がこらえるとスタッフは『え?』といった顔で固まった。数分たったのか、固まっているスタッフのうしろからこのオーナー、月島まりなが顔をだした。

「お、君たちそこにいたんだ!よかったー、その男子5人は今日から特別にここを使っていいって話になったからよろしくね!」

ちよつとまで、いままで話してなかったんかい。

「ちよつと待ってください月島さん。」

「ん?どうしたの美竹さん。」

いままで口を閉じていた蘭が声を荒げていた。

「ここはガールズバンド専用のスタジオなのにどうして異例でこの男子たちをさせるようにしたんですか?わたしは納得できません。」

さすがお嬢様、決まりなどにはしつかりしている。だがあえてつっこもう。どうして一部だけ赤なんだ。

「この5人はね、私がおもとスタッフとして働いていた別のスタジオで唯一やってたグループなんだけどね、私がやめてから潰れちゃったらしくて、申し訳ないなーって思っで特別に許可をだんしんだー。」

そんなんでいいのか月島さん。

「それならわかりますけど、その人たちでライブはできるんですか?私たちのファンっていうのはうれしいですけど、月島さんがそこまでして異例を出す必要はないと思います。ほかにスタジオがあるんですからここじゃなくてもいいじゃないですか。」

月島さんはまったく蘭の言葉に動じず、にっこりして

「大丈夫!この子たちは君たちと同等の実力と経験をもってるバンドだよ」

「それはどういう…」

蘭が聞くがそこで月島さんは手で制止した。

「あとはライブのあとね、いまはそれに集中しなくちゃ、じゃあ君たちはこつち来てね、手続きするから。」

「は、はい…えーと、じゃあAfterglowのみなさん頑張つて!、俺たち応援してるから!あとみんなのそのパーカーかわいいよ!」

扉がしまり、沈黙が生まれる。

「す、すごい人たちだったね…」

「でも蘭があそこまで反対するなんて、どうしたの？」

「らんー、イライラしてるー？」

「…違う、早くチューニングしよ。」

ライブが終わって客も帰ったところ、いま会議室にはAfterglowと、月島さん、そして例の5人の男子が立っていた。ちなみに月島さんとAfterglowが座っている。

「んじゃあ、ちゃんと説明しようか。アフグロはSummerSkyyって知ってる？」

「私はしってるよ！蘭たちは？」

「私はしってる。」

「あたしは知らないなー」

「知ってるよ！」

「知らない」

蘭、巴、つぐみ、モカが答える。

「さすが美竹さん、ちなみにそれが何か知ってる？」

「はい、配信動画サイトで有名なバンドグループですよ？高校生の中でもファンがたくさんいて、再生数が毎回1週間で500万回は稼いでいるグループで…でも、動画は静止画で、顔もわからないって有名なバンドです。」

「それでそんなすごいグループがどうかしたんですか？」

「そのSummerskyがこの5人なんだ。」

「…」

「ええええええええ!!」

5秒後、ひまりとつぐみが叫んで驚いた。

「でも今回からはスタジオでするライブをやってくれることになった

からってことで、特別に許可したんだよー。ふふふこれで予算がまた増える…！

じゃなくて、さすがに自己紹介もなしにはいそうですかはいかないからもう少しこのグループについて知ってもらおうかな。」

「え、ああ、自己紹介しろってことですか。」

「じゃあ…空から。」

「俺かよー…えっと、葉月空ていいいます、ベースをやってます。作曲担当です。つぎ敦也。」

「指名かよ、風間敦也。ドラムやってる。沖田。」

「はいはい、沖田涼弥です。キーボードやってます。あと経営担当します。それじゃタよろしく。」

「おう！俺は堂山タ！ギターやってんだ！担当、担当は…夏己のおもり役、んでこれが夏己」

「あいよ、日向夏己、ベースボーカルやってます、作詞やってるんだ。んでこの5人でSummerSkyです。よければ夏空でもいいからね、」

「夏空…夏、風、夕、涼、空…あつ、もしかしてこのグループ名の由来って…みんなの名前から？」

「ひまりさんピンポン！みんな夏にちなんだ名字と名前なんだ！ちなみに空がそれかんがえたから夏空でSummerSkyネ！」

「夕が元気よくこたえるとひまりと『イエーイ』とハイタッチした。ちなみにみんなアフグロの大ファンだからよろしくね！」

『よろしくー。』

「んで…」

突然夏己が蘭のほうに近づいていき、

「蘭、久しぶりだね、8年ぶりかな？」

「…え？」

蘭が固まった。

続く…？

2話 へこむわー

2話

「久しぶりだね、蘭ちゃん」

夏己が蘭に向かって言うのと蘭含めその場にいた10人が驚いた。

『ええー!!』

「わ、なんだよ突然。」

巴が蘭を抱きしめてかばうように夏己を見る。

「もしかして蘭に復讐とかか?」

いや、それはないだろ。とみんなして共感した。

「いやいや!!そんなことするわけないじゃないか!!」

ただ、蘭ちゃんとは親父同士が知り合いでさ、8年前に集まりがあつてその時少し話したんだよ!」

巴とひまりが蘭をみるとどうやら困惑しているようでそのまま固まっていた。

「ら、蘭、大丈夫か?」

「おーいー!らん!!!」

ひまりが揺さぶると我に返ったように意識が戻ってきた。そして夏己を見ながらあごに手を当てる。

「:たしかお父さんと一緒に知らない人の家に行ったのは覚えてるけど:アンタのことは知らない。」

そこまで蘭が言うのと夏己が固まった。

「ぶふっ」

夕が突然噴き出して笑い始めた。

「夏己...ドンマイ...ぶふっ」

肩をたたきながら笑いをこらえている。蘭がふと夏己を見ると寂しそうな顔して下にうつむいていた。

「えっと:ら、蘭は人見知りでさ、たぶん夏己:さんと同じで学校の人も覚えていないくらいだからさ、そこまで落ち込む必要はないとおも...」

巴がフオローするがなかなか顔を上げない夏己

「夏己！しっかりとしろよ！そんなことでいちいち落ち込むなよー！」
バンバンと背中をたたいて涼弥が夏己を慰める。

「別に…落ち込んでないし」

下を向きながら夏己が答える。

(絶対落ち込んでる)

またもやその場にいた全員がそう思った。特にアフグロのメンバーが思ったことは

『蘭と似てるなあ』

落ち込みは違うがこのひねくれた返し方がまさに蘭にそっくりなのだ。

「えつと夏己…さんごめんなさい。」

蘭が丁寧に謝るとバツと顔を上げて

「大丈夫！これからも会おうだし少しずつ打ち解ければいいとおもうし！ズビツ」

お分かりかと思うが少し涙目の夏己は空元気で答えた。

「ま、まあそうだよな！…これからこのスタジオでライブもするわけだし合同ライブの時にも一緒にするだろうしな！」

場を和ませるために会話を新しい方向へ向けた。

「え？合同ライブ？なにそれ面白そう!!」

夕がグイッと巴に近づく。

「あたしたちがつかつてこのサークルで季節ごとに5つのバンドで合同ライブするんだよ！あと4チームは今日は来ないけどな。夕さんたちができるかはまりなさんに聞かないとわからないけど」

Summer Skyの5人はものすごい勢いでまりなさんをも見る。

「ん？できるよ？ライブしてもらうんだから合同ライブに参加してもらわないと困るしねえ」

『是非！お願いします！』

机を乗り上げ返事する。夏己なんてもうメールも空いてない距離でまりなさんに近づいている。

「ちよー！夏己！近いよ!!」

空が夏己をまりなさんから離す。

「ま、それとかねてね、スタジオのセッティングにいろいろと男手も必要だから手伝ってもらうけどね！あつだからってスタジオ代は安くしないからね！」

さすがまりなさん、ちゃっかりタダで手伝ってもらおうとしてる。

『もちろんです！ありがとうございます！』

「まあ正直言うと今働いている子たちが大学が忙しくなるみたいで一週間後にやめちゃうからね、ちよどよく君たちが転がり込んできたからたすかったよ」

じゃあ今日はもう遅いし解散しましょ！みんなくらいから気を付けてね！あと蘭ちゃん！」

まりなさんが蘭を呼ぶと

「夏己君は蘭ちゃんのお父さんにあいさつしないといけないみたいだから一緒に家まで連れて行って!!」

「お、お父さんにですか…?」

「うん、さつきも言ったけど親父が仲いいから戻ってきたことを報告しにいかないといけないだ。たぶん俺の親父も一緒だと思う。」

「ま、それならいいよ。あたしは家に帰るだけだし。」

「ジャーねー！蘭ちゃん！夏己さん！」

ひまりとつぐみが手を振って走っていった。

「俺たちのことは呼び捨てでいいよー!!!」

「わかったー！またねー夏己ー!!」

2人が見えなくなると蘭がどんどん歩いて行った。

「ちよ…蘭ちゃん!!待ってよ！」

夏己もあわてて追いかけるが蘭は無視。数分歩くと突然蘭が振り返り

「あたし、あんたのことほんとに覚えてないの、だから気安く呼ばないで」

「…わかった。」

一息の沈黙が流れた後夏己は答えた。

「じゃあ俺はすこし後ろから歩くことにするよ美竹さん、君に迷惑はかけたくないしな」

夏己は蘭と10メートルほど離れて歩き始めた。

蘭が家を見つけると何やら黒い車が止まっていた。

「なにあれ…」

「お、なにになに?」

蘭とすぐ後ろで夏己の音がすると

「うわあああ!!」

と蘭が叫んであとずさりした。

「…もしかして三竹さん俺の存在忘れてた?」

「そ、そんなことないし…」

「どうした蘭?」

「あ、お父さん…」

蘭の家から蘭の父が走ってきた。